

## ヘンテコさんのまち

### ー文化芸術で広がる多様性のある社会ー

静岡文化芸術大学 文化政策学部 片山泰輔研究室(指導教員：片山泰輔)

代表者：安江芽生

発表者：小野南音、中土居和奏、藤原璃音、安江芽生

参加者：小野南音、中土居和奏、藤原璃音、安江芽生

#### 概要

「上田市を多様な背景をもつ人々が住む都市にする」というテーマに基づき、私たち片山ゼミが提案するのは、文化事業を通して人々をマジョリティによる同調圧力から解放する「ヘンテコさんのまちー文化芸術で広がる多様性のある社会ー」である。

製造業が産業構造の中核である上田市は、モノカルチャー的な特徴をもつ。産業構造の偏りは、就職の選択肢が少ないことで若者の首都圏への流出原因となるだけでなく、市民のライフスタイルや価値観の同一化をもたらす。先の見えない現代において、都市がモノカルチャーであることは、今後起こり得る変化に対応できず衰退の一途を辿る危険性がある。

持続可能とは、変化をし続けられるということである。人口減少時代において上田市が持続可能であるためには、「イノベーションの種」となる多様性を持つ必要がある。そこで私たちは、公民館を拠点に、市民を自分らしく生きる人「ヘンテコさん」へとエンパワメントする文化事業の展開を提案する。価値観の形成に深く関わる文化芸術分野に着目し、市民が多様な生き方を獲得するための文化事業を行う。専門性をもつ人材と協働し、市民の生活圏で多様な人や価値観との出会いを提供することで、都市全体が多様性をもつことがねらいである。

活動拠点は既存の9つの公民館である。各館に一人ずつアートマネジメント人材を配置し、それぞれの専門性を発揮できる環境を提供する。中・長期的な視野で計画を策定し、10年間での「ヘンテコさんのまち」実現を目指す。そのためには、行政が魅力的な労働条件を提示し、専門的で意欲的なアートマネジメント人材を雇用することが必要不可欠である。

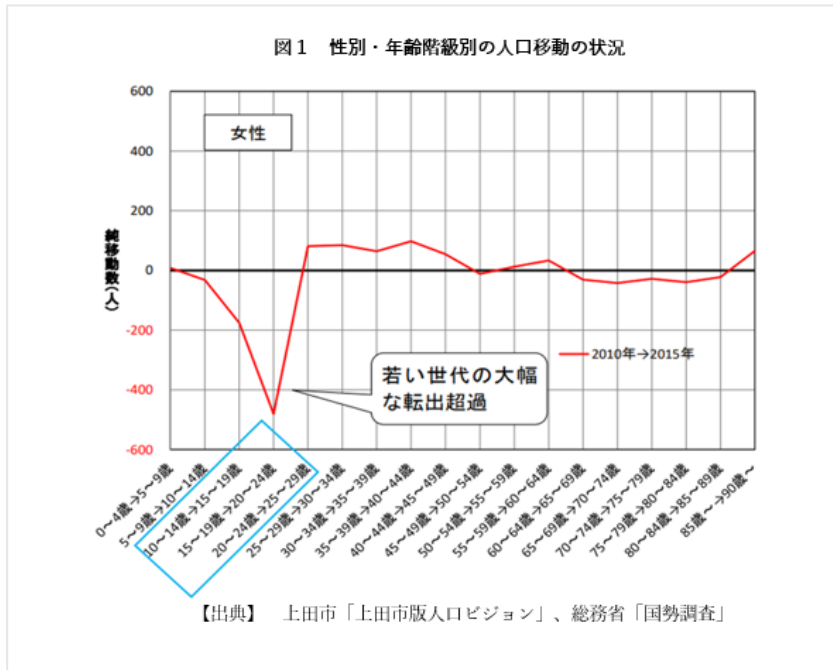
公民館が異なる価値観を持つ人同士が交流する最初の場となり、解放された様々な外見や考えを持つ人々が都市に多様性をもたらす存在となる。上田市が多様な人々が生きる都市、ひいては変容していく社会の中でも存続できる都市となるのである。

# 第1章 上田市の課題及びテーマの定義づけ

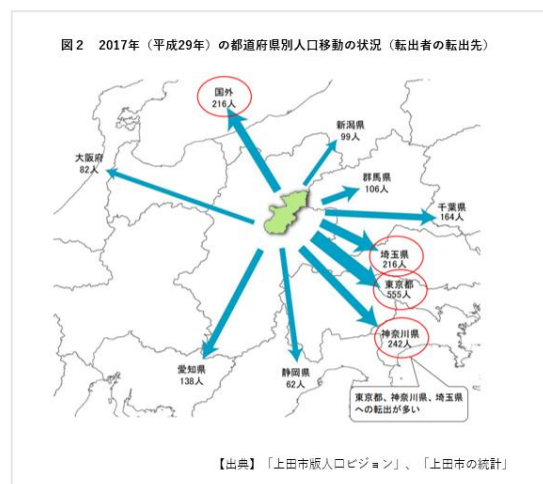
## 1節 上田市の現状分析

近年日本は少子高齢化に加えて、地方都市から大都市圏への人口流出が加速しており、上田市が「人口減少時代」と表す通り、上田市も例外なくこの問題に直面している。

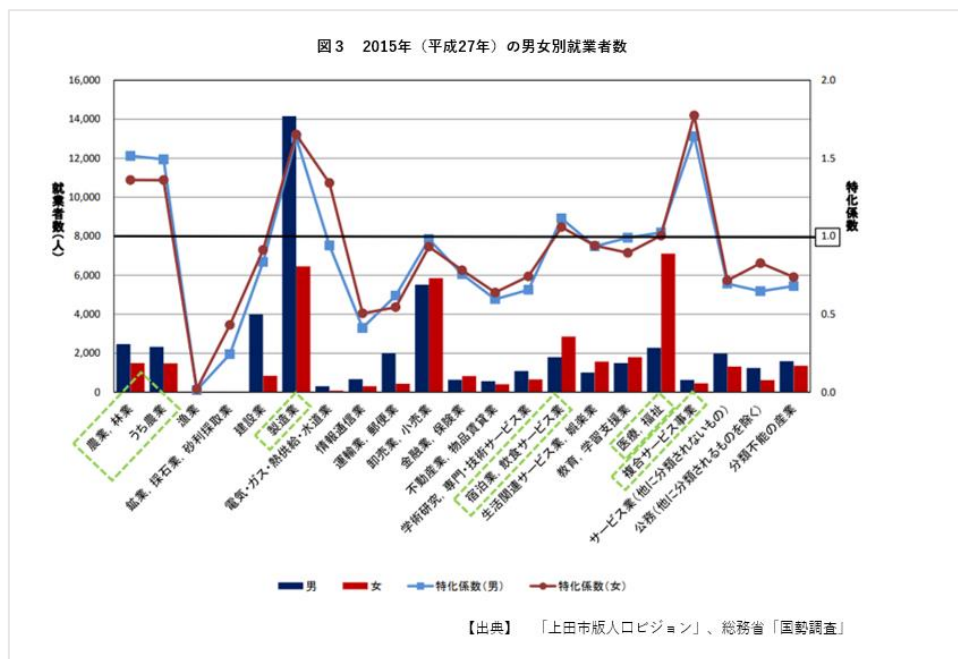
上田市の人口減少の要因分析をした際、出生・死亡による自然増減と転入転出による社会増減に区分することができるが、特に若い世代の転出超過による社会減による人口減少への影響が大きい。国勢調査より作成した性別・年齢階級別の人口移動の状況によると、なかでも、若い女性（15-19歳→20-24歳）は著しい転出超過となっている（図1）。



さらに、転出者の転出先を都道府県別で見ると、東京都が555人で最も多く、次いで神奈川県242人、埼玉県の216人と首都圏へ多く流出していることがわかっている（図2）。



次に、産業構造に注目する。「上田市版人口ビジョン」の調査によると、市民が就業している業種には大きな偏りがある。男女別就業者数をみると、男性は製造業が最も多く、総人口の約1割にあたる14,000人以上が就業しており、女性は医療・福祉、製造業、卸売業・小売業の順に多くなっている(図3)。



「上田市版人口ビジョン」中で「今後の景気の動向によっては再び厳しい雇用状態になることも予想されます」<sup>1</sup>と述べられている通り、製造業は世界的な景気の動向に影響を受けやすく、このような産業構造の偏りは破綻のリスクを伴う。

## 2 節 上田市の課題

現代の予測困難で変化が激しい社会・経済情勢は、VUCA と名付けられている。Volatility (変動性)・Uncertainty (不確実性)・Complexity (複雑性)・Ambiguity (曖昧性)の頭文字から成る言葉である。このように絶えず変容する社会において、事なかれ主義や現状維持の政策で都市が生き抜いていくことはもはや不可能といえる。これからの都市には環境の変化に対応する能力が求められるが、都市がモノカルチャーである場合それは困難である。実際に、2007年に財政破綻した北海道夕張市のように、特定の企業や業種に依存する都市は、産業構造の転換に対応できず衰退の一途を辿った。製造業を中心に発展してきた上田市もまたモノカルチャー性をもち、VUCAな現代での生き残りにおいて大きな課題といえる。

モノカルチャーの影響は、経済面だけに留まらない。市民が就業する業種の偏りによって、市民のライフスタイルや価値観の同一性が高まり、保守的なコミュニティが形成されやすいのである。同質性の高い市民らは、経済活動、行政サービスの享受、教育などあらゆる場面で変化を拒み、さらに都市のモノカルチャー化を加速させていく。

<sup>1</sup> 「上田市版人口ビジョン」(2020年3月改訂) p.22

変化を好まない性質は持続可能性を妨げるだけでなく、他文化の排除を生み出し、人口減少を助長させる結果に繋がることもある。例を挙げると、地域おこし協力隊の失敗事例としてよく取り上げられる地域住民とのトラブルは、このような性質に起因すると考えられる。自治体から、地域を変化させたいとの要請があり派遣された場合でも、実際は現状維持思考の住民らによって隊員が疎まれ、去っていくケースは少なくない。行政が変革を宣言しても、市民にその土壌がなければ頓挫するということである。また、同一化したコミュニティにおいて、マジョリティの価値観に合わないと考えた人々は、自分らしい生き方を求めて首都圏へと流出していくことが考えられる。

### 3節 テーマの定義とねらい

人口減少時代に上田市が持続可能であるためには、モノカルチャーから脱却し、上田市が多様性を持つことが根本的で最も重要な要素である。そこで、私たちは本論文のテーマを「上田市を多様な背景を持つ人々が共生する都市にすること」と定義する。

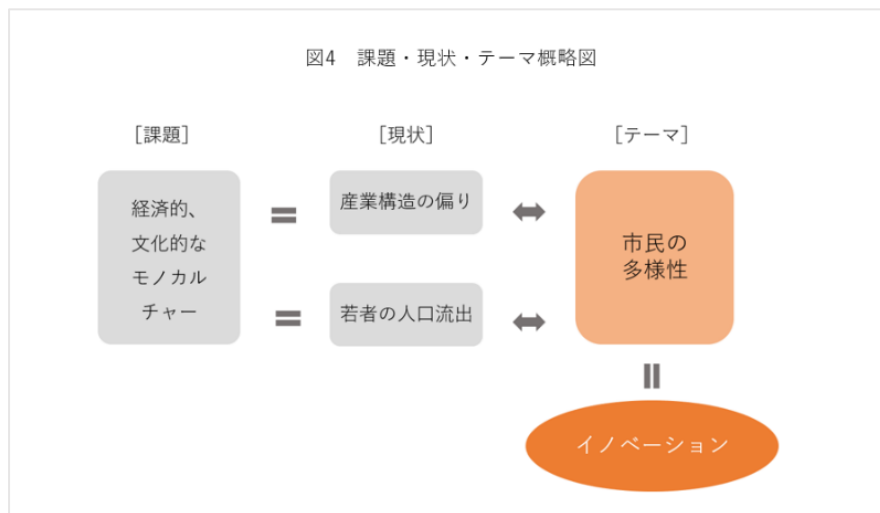


図4は、私たちが考えたテーマの把握を図式化したものだ。持続可能とはすなわち新しいことに挑戦し続けること、つまり、イノベーションを起こし続けることである。その起爆剤となるのは、多様な価値観をもち、多様な生き方をする市民である。ここでいう多様な生き方の市民とは、障がいの有無、セクシュアリティ、国籍などの一般的なマイノリティ観に留まらず、奇抜な髪色の人、アーティストの人、パートナーを必要としない人など一般的には“変わっている”と受け止められる人々のことを指す。

さらに、“多様な生き方の市民”のモデルとして、“普通”の枠に囚われない生き方をする人「ヘンテコさん」を設定する。市民をマジョリティによる同調圧力から解放し、「ヘンテコさん」へとエンパワメントすることで、市民は生きやすさを獲得するとともに、変化への拒絶心が解消される。最終的には、上田市に「ヘンテコさん」という「イノベーションの種」をもたせることがねらいである。

## 第2章

### 1節 プラン概要

「上田市を多様な背景を持つ人々が共生する都市にすること」というテーマに対して私たちが提案するプランは、「ヘンテコさんのまちー文化芸術で広がる多様性のある社会ー」である。「ヘンテコさん」とは、前述した通り“普通”の枠に囚われない生き方をする人々のことを指す。多様性のある社会を実現するための手段として、文化芸術に着目した。その理由は、文化芸術を自己表現の手段の一つとして利用することによって、個性溢れる都市の実現に繋がると考えたからである。文化芸術の意義は、既に明確化されている。文化庁によると、「第一として、豊かな人間性を涵養(かんよう)し、想像力と感性を育む等、人間が人間らしく生きるための糧となるものである。第二として、他者と共感し合う心を通じて意思疎通を密なものとし、人間相互の理解を促進する等、共に生きる社会の基盤を形成するものであると言える。」と述べられている。つまり、多様性のある社会を実現するための手段の一つとして、文化芸術が効果的であることは明確である。

本プランの狙いは、文化芸術分野が価値観の形成に深く関係することを鑑み、市民が多様な生き方を獲得するための文化事業を上田市にある9つの公民館を拠点に行うことである。公民館に着目した理由は、上田市内に広く分布しているため市民との物理的距離が近いためである。公民館であれば市民の生活圏での事業展開が可能となり、多様な人や価値観との出会いが各地区で創造されることで、やがて上田市全体へその効果が拡大していくと想定される。従来のライフスタイルでは交わることのなかった人々との出会いを通して、市民が多様な価値観に触れる機会を提供し、自身の心の内を表現する且つ他者と対話する方法を身につけることで、地方都市特有の閉鎖感へアプローチすることを目指す。そのためには、行政が魅力的な労働条件の下、専門的で意欲的なアートマネジメント人材を雇用し、多様性のある社会づくりに貢献するような公民館事業を展開できる環境を整えていく必要がある。つまり、文化事業を行うにあたりアートマネジメント人材を上田市に呼び込むために、行政が積極的に資金を投じていくことが重要なのである。

本プランを通して公民館が異なる価値観を持つ人同士の交流の場となり、上田市が多様な背景を持つ人々が共存する都市、さらには変容していく社会の中でもイノベーションによって存続していくことのできる都市へと変化することをゴールとして設定する。

### 2節 プラン内容

本プランで呼び込みたい専門的な人材のターゲットとして、他地域では十分に能力を発揮できていないアートマネジメント人材を設定する。アートマネジメント人材について、本プランでは、学芸員資格の保有者やアートコーディネーターといった、アートに関する専門知識や経験を有する人材のことを想定している。このターゲット設定にあたっては、先に第1章で述べたような若い女性(15-19→20-24歳)の著しい転出超過を考慮している。アートマネジメント人材は、劇場・ホール等の文化施設や実演芸術団体等の芸術団体が多数存在し、文化的な仕事の雇用機会が豊富な首都圏に多く住んでいるのが現状である。しかしながら、文化的な仕事の働き口は採用者数が少なく、加えて過酷な労働条件が提示される場合が少なくないため、高い能力や意欲を持ちなが

らも、その力が十分に発揮できないことに不満をもつアートマネジメント人材は多い。

ここで、アートマネジメント人材をはじめとするクリエイティブな職種の人材が世の中にもたらすメリットについて述べる。行政が文化芸術を政策に織り込んだ先進事例として、イギリスの「クリエイティブ・インダストリー」政策を挙げる。イギリスのデジタル・文化・メディア・スポーツ省によると、クリエイティブ産業は「個々人の創造性、技能、および才能に基づくものであり、知的財産の展開及び利用によって富と雇用を創造する可能性がある産業」と定義されている。また、「クリエイティブ・インダストリー」政策の対象とされる分野は、「広告」「建築」「美術及び骨董品市場」など様々あるが、本プランに関連する「映画・ビデオ産業」などを含む計13個の産業分野によって構成されている。さらには、「クリエイティブな経済」について以下の6つの条件によって定義されている。

1. クリエイティブな経済は、経済成長と経済発展を生み出す可能性のあるクリエイティブな資産に基づく発展的な概念である。
2. クリエイティブな経済は、所得創出、雇用創出、輸出入増加を促進すると同時に、社会の関与、文化的多様性、人材開発も促進することができる。
3. クリエイティブな経済には、技術、知的財産、観光目的と関わりのある、経済的、文化的、社会的側面が含まれる。
4. クリエイティブな経済は、経済全体に対して、マクロ・ミクロレベル問わず、発展的側面を持ち、かつ、部門横断的な関わりを持つ、知識に基づいた経済的活動である。
5. クリエイティブな経済は、革新的な総合政策対応や省庁間の活動を必要とする、実現可能な発展の選択肢である。
6. クリエイティブな経済の中心には、クリエイティブ・インダストリーがある。

このように、クリエイティブ産業は経済活動を含めた社会全体に文化的多様性などといった良い影響をもたらすことが分かる。

以上のことから、文化的な働き口を求めているアートマネジメント人材に焦点を当て上田市に呼び込むことで、市民の文化活動に寄与してもらい、結果として市民それぞれの個性を尊重した多様性のある社会の実現、ひいては持続可能な社会へ繋げることができると考える。

次に、本プランの具体的な事業例として「クリエイティブ・インダストリー」政策の中の「映画・ビデオ産業」分野に焦点を当てた事業内容を挙げていく。

上田市では、「うえだ城下町映画祭」や「上田映劇」「犀の角」「フィルムコミッション」などといった映画に関するイベントや施設等が充実している。そのため、既に上田市に根付き市民にとって身近な芸術文化といえる映画文化を活用した事業を行うことが良いと考えた。事業のターゲットは高校生から30歳ぐらいまでの若者を想定している。このターゲット設定は、現在行われている公民館事業では比較的对象となる事業が少なく、公民館の利用頻度が少ないと推定される年代であることが選定理由である。

具体的な事業内容としては、定期的に公民館等の施設を利用して映画の上映会を行い、様々な価値観に触れられる機会を提供する。「ヘンテコさん」へとエンパワメントするための次の段階として、夏休みなどの長期休みを開催期間として定め、各人が所有するスマートフォンのカメラア

プリを用いてショートムービーを制作するワークショップを開く。作品の制作過程を通して自分自身を理解することに繋がったり、他者の感性に触れたりすることができる。

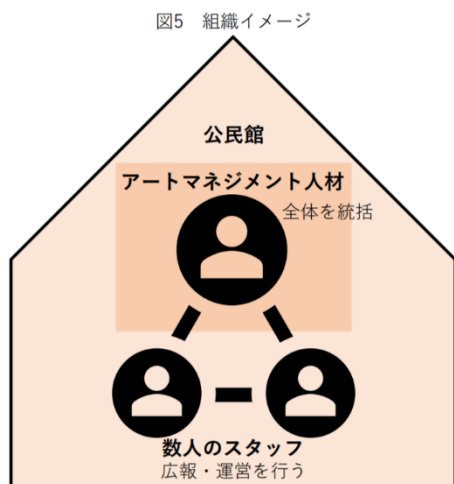
その他にも、公民館が市民の住環境から近いという利点を活かし、若者が家庭や学校・職場など現在置かれている環境から少し離れて、自身の感情と向き合うことのできる場所をつくる事業の展開を想定する。

このような事業の先進事例として、前述した上田市の民間文化施設「犀の角」では「家出チケット」というものを販売しており、行き場のない人々にとってのサードプレイスを提供している。実際に、この「家出チケット」は「犀の角」で高い人気を得ている商品であり、人々が自分の居場所を求めていることが窺える。その他にも、上田映劇では「うえだこどもシネマクラブ」という事業を行っており、学校に行きにくい・行かない子どもたちの新たな「居場所」として映画館を活用する「孤立を生み出さないための居場所作りの整備～コミュニティシネマの活用～」事業を2020年から開始している。このように、上田市内では既に民間レベルで行き場のない人達の居場所を提供する事業が活発に行われていることが分かる。しかしながら、物理的距離や年齢による行動範囲の制限が障壁となり、このような場所に行けない人々も多く存在すると考えられる。このようなアクセスの困難さという点において、公民館は上田市内に9つ点在しているため、市民にとっては比較的気軽に行きやすい距離に位置している。行き場のない人達にとって公民館が居場所となり、社会から排除されることのないようにするための手段として文化芸術を利用することが望ましい。文化芸術を通して、自分が持つ「ヘンテコ」をポジティブに受け入れることで自己肯定感が上がり、さらには他者が持つ「ヘンテコ」を認められるようになることで社会から異なる人や考え方を排除する意識が薄れていく。このようにして「ヘンテコさん」が社会の中で生き生きと存在できるようになり、9つの各公民館で起きた市民の意識の変化が次第に上田市全体の変化へと繋がっていく。

以上のような事業内容はあくまでも私たちが考えている例のひとつである。それぞれの地域的な特性を活かした事業がアートマネジメント人材の専門性を存分に活用し、より有意義で魅力的な公民館事業を展開していくことが理想である。

### 第3章 運営方法

#### 1節 実施体制



本プランを進めていく実施体制として、上田市公民館全9館に、各館一人ずつ専門的知識を持つアートマネジメント人材を配置する。その人材を各館のトップとし、既存の公民館スタッフ数人とともに公民館の運営を行う（図5）。公民館内の組織は比較的小規模であることから、専門的知識を有するアートマネジメント人材をトップとしつつも、スタッフを含めた全員で事業内容について会議を行い、詳細を決定していくイメージである。運営に関して合議制をとることで、多様性を

持った視点が確保できる。

また、9館に一人ずつ配置する理由は以下の2つである。

理由① 各地区に合った柔軟な事業が可能となるため

理由② 物理的な距離の遠さから、複数館の運営を兼任するには不便が伴うため

特に理由①を重要視している。同じ上田市内といえども、各地区はそれぞれ人口構造・地理的条件等の違いを持っている。画一的な事業では、そういった違いに対応できない。9館に一人ずつ配置し、地域に適応する事業を行うことで、より多くの市民が興味を持ち、訪れるようになると考えられる。

また、理由②は、少数での運営を前提としているため、トップであるアートマネジメント人材が市内を移動し、複数館を運営するという状況では、各館を十分に管理することが難しいと想定したうえでの理由である。

さらに、9つの公民館同士には連携を持たせる。このことに関して次の2案を提案する。

案① 各公民館の事業内容の広報を9館全体で行う

案② 各公民館内での活動の次のステップとして、サントミュージゼという場を設定する

案①に関して、公民館同士で広報を担当することにより、市全体に公民館活動を広められると考えている。各館で独立して活動するのではなく、こういった関わりを持たせることで、9館がともにパワーアップしていける。

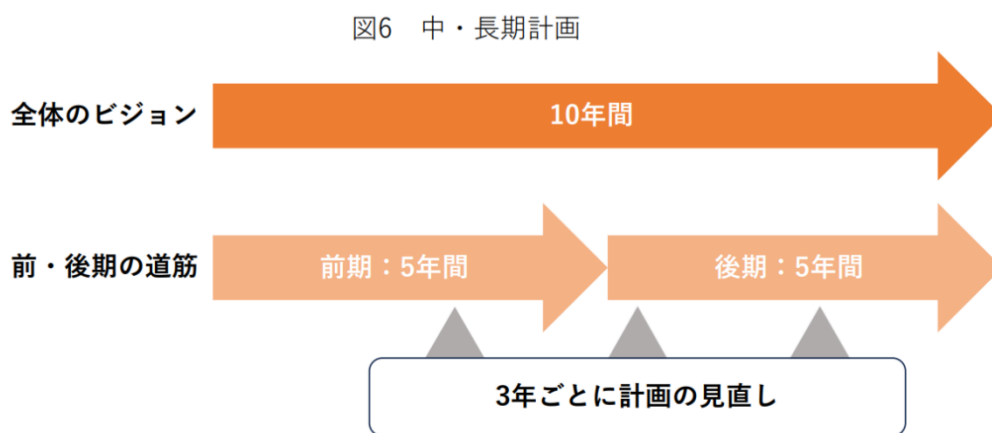
特に案②に関しては、公民館内で新たな価値観と出会った人のさらなる自己実現の場として、サントミュージゼを想定している。サントミュージゼに表現の場を設定することで、公民館活動が館内にとどまらず、街へ波及していくことにつながると考えている。案①、②の2案は、街全体で9館の公民館とサントミュージゼがともに多様性を育んでいくイメージである。

また、本節冒頭に記述した「アートマネジメント人材」を確保する一つの手段として、公民館に対する指定管理者制度の導入を提示する。しかし、この導入の目的はあくまで「多様性を持つ



た事業展開」や「直営では叶わない、好待遇での文化的な雇用機会の創出」であり、コストカットのためではない。そういった指定管理者制度本来の目的に立ち返り、通常の公務員給与よりも高い額の給与を設定し、全国から指定管理者を募る。特に、学芸員資格を取得しておきながら、文化的な仕事の門の狭さや、給与の低さなどの理由から、資格を活かせていない現状にある人も多い。今回のプランにおいて、人材確保に関して指定管理者制度の導入という方法を用いる場合、そういった層の人々に需要があると言え、多くの応募が見込めると予想される。

## 2節 中・長期計画



プランの中・長期計画は、前期 5 年間・後期 5 年間で、3 年ごとに最終ゴールまで 3 回見直しの機会を設ける構想である（図 6）。3 回設けた「計画の見直し」では、市民や職員のフィードバックから、事業内容や運営体制について審議を行う。見直しを行うことで、目標に向かってより的確なアプローチを行うことが可能になる。具体的な各期間での目標は以下の通りとする。

### 前期 5 年：個人レベルでの公民館活動参加-ヘンテコさんの解放

計画前期 5 年では、「他人と異なるため、本来の自分を隠し、殻に閉じこもって生きてきた人が、それを表に出せるようになること」を目指す。

他人の目を気にしたり、評価を気にしたりといった日々の生きづらさを持つ「ヘンテコさん」が、興味を持った公民館事業に参加するで、「本来の自分を出してもいいんだ」と思えるようになることを理想とする。

先に述べた「ヘンテコさんとしての自分を認めること」に加え、「表しようもないモヤモヤを抱えていた人がヘンテコさんとしての自分を見つけること」も目的のひとつである。前者が「自覚のあるヘンテコさん」だとすれば後者は「自覚のないヘンテコさん」である。こういった人が公民館事業へ参加することで、他者と違う自分に気づき、そんな自分を肯定できるようになる。

前期 5 年において、まずは個人レベルでの公民館事業への参加を通して、ヘンテコさんを解放させる。

後期5年：個人から集団へ—所属が異なる人々が公民館に集まるように

計画後期5年では、「所属が異なる人々が公民館に集うこと」を目指す。

前期5年の目標は、個人レベルでの公民館活動への参加を通して、「ヘンテコさん」を表出させることであった。そういった「ヘンテコさん」や、今までも公民館に訪れていた人はもちろん、老若男女問わず公民館に集まることを後期の目標とする。

普段、それぞれが属しているコミュニティでは、関わる人が固定化されてしまっている。その枠から飛び出し、公民館という場所における文化芸術活動への参加を通して、今まで関わってこなかった人ともコミュニケーションをとる。そうしたコミュニケーションの中で、人々は自分にとって予想外の価値観と出会う。その出会いこそが公民館事業の目的である。

10年間のゴール：様々な容姿や考え方を持つ人が住む都市になる

10年間のゴールは、上田市が「様々な容姿や考え方を持つ人が住む都市」となることである。公民館事業を通して多様な価値観を持つ人の出会いを創出し、互いの生き方が尊重される都市にする。近年では、新型コロナウイルスの流行により、人々は急激にライフスタイルを変化させる必要に迫られた。こういった予想外の事態に対応するには「多様性」が鍵となる。今回のプランによって育まれる多様性は、上田市がそんな変化の激しい時代を生き抜いていく中で、「イノベーションの種」となる。また、ヘンテコさんにとって「様々な容姿や考え方を持つ人が住む都市」＝「自分らしく住み続けられる場所」である。ヘンテコさんが上田市を「自分らしく住み続けられる場所」と認識することは、市外へと転出してしまふことを防ぐことにも繋がる。

#### 第4章 実現可能性：低コストで高いパフォーマンス

専門性が高く、やる気のある人材を雇用するためには、やりがいに見合う給料を用意し、受け入れることが必要である。そのための1つの手段として、指定管理者制度を取り入れることを提案する。

ここでの指定管理者制度は経費を削減するためではなく、アートマネジメント人材に十分な給与を与えるため導入する。公務員の給与体系の中では、アートマネジメント人材に高い給与を与えることは難しいため、指定管理者制度を取り入れる。また、雇用した人物には定住してもらいため、任期のある地域おこし協力隊などではなく、指定管理者の導入を進めていくべきである。

例えば、アートマネジメント人材に600万円の年収を与えたとする。この金額は、上田市の一般行政職の平均給与よりも高い金額である。この金額を公民館に派遣をする9人のアートマネジメント人材に与えたとして、その金額は、5400万円となる。しかし、既に公民館で雇用をしている職員がおり、そこに予算を上乗せ分で済むこととなるため、実際には5400万円よりも安くアートマネジメント人材を雇用ができる。

私たちが提案するのは公民館という既存の施設を使用した取り組みであるため、新たに施設を建築することや大規模なイベントを新たに開催することがない。新しい施設を建設すると、例えば平成7年に上田市で開館した、上田マルチメディア情報センターは総事業費がおよそ18億3500万円<sup>2</sup>となっている。また、大規模なイベントを開催するのにも多額の資金を要する。アートフェスティバルを開催するとすれば、そこにかかる人件費や会場の確保、広報など行うことが多くであり、事業費や労働力が必要となる。

公民館にアートマネジメント人材を雇用することであれば、新たに施設の建設をすることやイベントを行うことよりも遙かに安い金額で上田市に変化をもたらすことができる。さらには公民館を使用した取り組みであれば継続的に行うことができるため、イベントとは違い一過性で終わりにくい仕組みを構築できる。

このように人件費に予算を使い適した人材を雇用し、地域に点在した公民館で市民に寄り添う取り組みを行っていくことで、公民館が子育て世代やお年寄りだけでなく、地域の様々な人にとっての居場所として活用できるだろう。

---

<sup>2</sup> 上田市マルチメディア情報センターホームページ「施設概要・ご利用方法」より

## 第5章 結論：ヘンテコさんが自分らしく住み続けられる都市へ

本研究では、「上田市を多様な背景を持つ人々が共生する都市にすること」をテーマとし、公民館を活用した取り組みで、多様な価値観・多様な生き方をする「ヘンテコさん」をエンパワメントすることで、上田市を持続可能な都市にしていく方法を提案した。

私たちは、上田市が経済的・文化的にモノカルチャー性を持っていることを課題として、今後の社会を生き抜いていくため上田市がイノベーションを起こし続けることができる都市になる必要がある。

市内に9つある公民館の各館に1人アートマネジメント人材を雇用し、それぞれの公民館の特色にあった事業を創造していくことで、生きづらさを感じていた市民が自らの居場所を発見し、本来の自分が持つ自らの考えや外見をさらけ出せるのだと考える。優秀なアートマネジメント人材を雇用するための人件費が必要となるが、公民館という既存の施設を利用するため、新たに施設を建設することやイベントを開催するよりも、予算が抑えられる。

上田市がヘンテコさんにとって暮らしやすい都市となれば、常に新しいことに挑戦していく都市になると考えられる。ヘンテコさんが増えることは、様々な外見や考えを持つ人が住み、またそれを受け入れる都市となり、様々な立場の人が自分らしく住み続けられる場所となる。このような都市になれば、上田市から首都圏への若者の流出が抑えられると推測する。

このような、公民館を活用した事業によって、上田市に住む人々が本来の自分を表に出して生活することができる多様性のあるまちとなり、変化の激しい現代において、波にのまれることなく新しいことに挑戦し続けることができる。公民館をアートマネジメント人材と共に活用していくことで上田市に良い影響をもたらすと確信している。

〈参考文献〉

- ・ 上田市（2020年3月改訂）「上田市版人口ビジョン」
- ・ 上田市マルチメディア情報センター ホームページ  
(<https://www.unic.jp/>)（最終閲覧日：2023/10/18）
- ・ 総務省「ライパイレス指数及び平均年齢・平均給与月額等」（2022）『給与・定員等の調査結果等』（[000853243.xlsx \(live.com\)](https://www.live.com/000853243.xlsx)）、（最終閲覧日：2023/10/18）
- ・ 太下 義之（2015年9月15日）「「クリエイティブ・インダストリー」とは何か？」、ネットTAM  
(<https://www.nettam.jp/course/creative-industry/1/>)、（最終閲覧日：2023/10/15）。
- ・ 文化庁（2011年2月8日閣議決定）「文化芸術の振興に関する基本的な方針」  
([https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka\\_gyosei/hoshin/kihon\\_hoshin\\_3ji/01-1.html](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/hoshin/kihon_hoshin_3ji/01-1.html))、（最終閲覧日：2023/10/15）。